

## 福祉文化の再生の時

園長 児嶋 草次郎

オホーツクの海は湖のように静かでした。日向灘のように、波が押し寄せる途中で白く砕け散るような荒々しさはなく、ゆっくりとまるで呼吸でもしているように、寄せたり引いたりしていました。数万年年前、北海道は千島列島とともに大陸とつながっていました。マンモスやナウマン象が北から下りて来て闊歩していたと言われます。氷河期が終り海水面が100mほど上がって北海道という島ができたのです。海の底に当時の大自然が静かに眠っているのでしょうか。様々な氷河期の命を吊うかのように、波は静かにたゆたっている、そんな感じです。丸木舟での航海をいつでも受入れてくれそうな静けさです。

その後縄文人が住み付き、このオホーツクの海岸も漁をするため歩き回ったに違いありません。私たちもしばらくその海岸にたたずみ、海の呼吸を聞き、私たちの故郷宮崎より柔らかな光と空気を肌で感じました。私は、縄文人が矢尻や石斧として使っていた黒曜石の原石は落ちていないかと捜してみましたが、残念ながらそれはなく、代わりに、琥珀（こはく）や翡翠（ひすい）等の小石を何個か拾うことができました。波が静かなせいか、小石は、磨き粉で磨きあげたように表面がツルツルで、手の平に吸い付きそうでした。確かに、このオホーツク海岸は異郷の地でした。

前置きが長くなりましたが、私は、石井記念有隣園の園長宮城さんと一緒に、北海道紋別郡遠軽町にある北海道家庭学校を6月27日（火）に訪問しました。宮城さんは初めて、私は50年ぶりとなります。

6月の「友愛通信」で皆様に御案内をさし上げましたが、4年ぶりに8月の「石井十次セミナー」を開催することになり、今年「北海道家庭学校」の「福祉文化」を取りあげることにしたのです。そこで2名の関係の方に講師をお願いしました。二井仁美（にい・ひとみ）奈良女子大学研究院教授と、北海道家庭学校樹下庵診療所の富田拓（ひろし）児童精神科医師です。

二井教授は昨年3月まで旭川市の北海道教育大学にお勤めで、北海道家庭学校の創立者留岡幸助の研究者です。度々家庭学校にも行かれ、資料整理にも取り組まれ、百年史編集委員会の委員長もされたようです。北海道家庭学校の歴史研究では権威でしょう。先生が奈良に帰られたということを知らず、手紙を北海道家庭学校に送ったり行き違いもありましたが、心よく講師を引き受けてくださいました。

もう一人の講師富田拓先生には、今回、何としてでもお会いし、直接言葉を交わす必要性を感じました。先生は、網走刑務所の医務課の医師でもあります。先生の存在を知ったのは、2020年に北海道家庭学校より出版されたガイドブック『「家庭」であり『学校』であること』によります。この本で富田先生が、医師の資格を持ちながら、谷昌恒（まさつね）校長時代に5年間ほど指導員（教護）として家庭学校で働いたことがあるという特異な経歴の持主であるということを知ったのです。この方だったら、現場の職員の気持も分かってくださっているだろうし、私たち施設の味方になってくださるだろう、そう思い講師をお願いしました。一応メールで講師を引き受けてくださっています。家庭学校には週2回しか来られず非常にお忙しい方の方でしたので、今回は、先生の御都合に合わせて訪問したのです。

それにもうお一人、家庭学校の現校長の軽部晴文先生に御挨拶すること、そして現在の北海道家庭学校を宮城園長と一緒に確認することも必要と感じました。それらが訪問の理由です。

なぜ今、北海道家庭学校なのか。そこをまず説明する必要があります。国は平成28年（2016）に児童福祉法を改正し、社会的養育の家庭養育優先原則を明記しました。そしてその具現化として平成29年（2017）に「新しい社会的養育ビジョン」が出され、里親委託率を欧米並みに引き上げる方向性も明示されました。そのビジョンは10年計画で、各都道府県において、その推進計画のもと着々と進められています。私たちは、家庭養育優先についても里親推進についても何ら異論はないのですが、その「新しい社会的養育ビジョン」の中に、施設否定の価値観が流れていて、強引に“世界標準”にもっていかうとしていることに、非常に不安を感じました。多くの社会的養護の子供たちを救い育て、自立させて来た、私たちの先人たちの築きあげて来た言わば歴史と「福祉文化」に対する敬意も感謝も、微塵（みじん）もないことに、腹立たしささえ感じました。

そこで前回の石井十次セミナー（令和元年2019）で「家庭に恵まれない子ども達の生活の場を取り上げないで！」と題する宮崎・高鍋宣言を発表。厚労大臣あての「日本の福祉文化と子どもの未来を守るための要望書」を作成し、施設への入所停止や制限に関する文言の削除を求めて署名活動を始めました。

そして、43,325筆の署名を令和3年12月22日に、厚労省の佐藤英道副大臣に要望書に付けて提出しました。

ここまでがその経緯です。最近の「福祉新聞」（5月30日付）によりますと、施設の整備目標を設定する方針を厚労省が明らかにしたとあります。里親の委託率の目標をビジョンで明らかにしているので、施設数もそれに合わせて減少させていくという腹なのかもしれません。

特に思春期の児童の多い児童養護施設や児童自立支援施設では、生活の場であるだけにその思春期特有のトラブルが次々におきます。施設を減らそうとする「ビジョン派」の人々は、そこを施設の責任として集団生活の弊害として、今以上に突いてくるでしょう。そうすれば、欧米と同じような流れになっていきます。施設が機能しなくなり、結局子供たちは里親宅をたらい回しになっていくのです。

もう一度、私たちの先人たちが築いて来た歴史と「福祉文化」を学びなおすべき時ではないかと思うのです。

留岡幸助は1864年生まれですから、石井十次より1歳年上ということになります。岡山県高梁市に生まれますが、生後間もなく商人の家に養子に出されます。18歳の時に高梁教会で受洗しキリスト教徒となり、その後、同志社英学校に入学。教誨師（きょうかいし）として北海道集治監空知文監（刑務所）で働くうちに非行少年の教育の必要性を感じるようになり、アメリカに游学（2年間）。ちなみに教誨師とは刑務所で受刑者に対して宗教による徳育を行う人のことのようにです。帰国後明治32年（1899）に東京に「家庭学校」を開設。今の児童自立支援施設の旧称である感化院です。そして、石井十次が亡くなった大正3年（1914）、北海道の現在の地に家庭学校の分校を開設。留岡幸助にとって、石井十次の福祉実践は、常に先を走る一つの目標でもあったと私は見えています。明治43年（1910）留岡は、茶臼原孤児院を視察していますが、日本一の理想的孤児院と激賞しています。北海道に家庭学校分校を作る時、石井十次の事業を意識しなかったはずはありません。

二井仁美教授は「『家庭』であり『学校』であること」の中で、東京家庭学校時代の教育の特徴を五つにまとめておられます。

- 1、自然による教育。
- 2、家庭的であるとともに、「規則ある生活」を通しての教育。
- 3、性情を和らげ、優美な心情を養うこと。
- 4、基礎学力の付与。

5、教育の基礎は身体にあると考え、食事や衛生、採光や換気に注意する。

これらはどれも石井十次の教育に重なります。石井十次の後継者は自分であるという自負も持っていて、広大な北海道に、新しい農村作りも含めて、さらに雄大で強靱な理想郷を描いたのかもしれませんが。

留岡は昭和4年(1929)に亡くなりますがその後、特に戦中時代は支援もなくなり苦難の経営と生活を強いられましたようです。それでも家庭学校は生き残りました。岡山孤児院は、大正15年(1926)に解散し、石井記念友愛社として事業を再開するまで休眠状態に入ります。その20年間のうちに、石井十次や職員・子供たちの築き上げた文化の多くが失われていきました。

戦後、家庭学校は社会福祉法人として認可を受け、北海道の分校は、北海道家庭学校として再スタート(昭和27年)。留岡幸助の四男清男が校長に就任し、事業の再生と充実に努めます。昭和44年(1969)には、谷昌恒氏が校長に就任。

私は大学を卒業した昭和48年(1973)年の春から1年弱、この北海道家庭学校で実習をさせていただいています。大学時代は大学紛争で満足に勉強しておらず、下宿に閉じこもって小説ばかりよんでいた私だったので、父が心配して「北海道家庭学校」で勉強して来いと命じたのです。私が家庭学校で学び得た「福祉文化」が三つあります。

① 機関紙「ひとむれ」を毎月発行していました。今も毎月送ってくださいますが、6月1日号で1019号です。岡山孤児院時代にもこのような情報発信はしていましたが、戦後の石井記念友愛社ではできていませんでした。その重要性について再認識し、私は友愛社に帰り「友愛通信」を新たに発行するようにしました。

② 次にカルチャーショックだった話です。家庭学校でビニールハウスに入ると、野菜の苗と花の苗とが同格に並んでいたのです。当時友愛社では、野菜を育てることで精一杯で、花など育てる余裕などなかったのです。「『家庭』であり『学校』であること」を今回読んで、「情操的栄養」をつけるための実践であると確認できました。私は「心の栄養」をつけるためと自分なりに解釈し、友愛社に帰って、せっせせっせと花や花木を増やすことに努力して来ました。あれから50年、友愛社は、1年中花の絶えない環境となりました。

③ 「情緒的栄養」と言えば音楽や芸術・工芸もそうです。家庭学校の子供たちは、アイヌの工芸である彫刻を自主的にやっていました。そして、秋の収穫祭の時に展示し楽しんでいました。私はそれに合わせて家庭学校の木工部で糸ノコを借りて宝石箱やレター箱を作りました。現在、友愛園の子供たちは、秋の収穫感謝祭が近づくと、数名が彫刻刀で看板作りに励みます。これも北海道家庭学校から持ち帰った、言わば「福祉文化」です。今では、子供たちの作った看板は、友愛社の文化ともなっています。

今思えば、父は失ってしまった石井記念友愛社の福祉文化を、私を北海道家庭学校で実習させることで補おうとしたのかもしれませんが。北海道家庭学校は、先人たちが築き上げた福祉文化が今も息づいている日本では数少ない施設の一つなのです。そこからみんなで、もう一度今回学び直そうというわけです。

例えば、留岡幸助は、教育の基盤として「三能主義」を称えています。「能く働き、能く食い、能く眠る」です。愛着関係を再構築するには、夫婦小舎制が最適であるとも考えました。

アメリカの心理学者マズローは、欲求5段階説というものを称えていますが、基礎的なものから言うと、生理的欲求、安心安全の欲求、所属と愛の欲求、自尊心と他者からの承認の欲求、自己実現の欲求です。一般的には三角形の図で、自己実現の欲求が最上部になるように説明されます。留岡の三能主義や夫婦小舎制は基盤の部分为保障するものになるのでしょう。

またマズローは、人間を突き動かしている本能として、①食欲、②性欲、③群れる、④攻撃・征服、⑤逃走の5つをあげています。思春期に入ると、これらの本能が衝動として強く度々出て来ることは大人のだれもが経験上自覚しています。その思春期の衝動をコントロールできるようになることが、ヒトである人間の永遠の課題です。おそらく縄文時代から、コントロールするための知恵を我が子につけるために、アレコレと考えて来たのです。近いところと言えば、鹿児島薩摩藩の郷中教育があります。先輩と後輩が切磋琢磨し合うことで、互いの自律力を養いました。また大分県の私塾咸宜園では、多くの若者が全寮制の生活をしましたが、一人ひとりに役割当番を与えることで、いじめを克服しようとしています。

この狭い児童福祉施設や児童自立支援施設の世界も例外ではありませんし、特に虐待やネグレクトを体験した子供たちの中には、人間不信や自己コントロール力の弱さ、規範力の弱さなどを抱えた子が多く見られます。ですから時には施設内でも暴走してしまいます。施設生活を通して人間不信を乗り越え自律力等をどう身につけていくかが最大の課題なのです。

先ほどの児童精神科医の富田先生は、現場で指導員（教護）を経験されているだけにその状況がよく分かっておられます。

「彼らの攻撃性に少なくとも一定の期間耐えることのできる体制がなければ、そもそも処遇が成り立ちません。」

「海外の児童青年精神医学の教科書では、非行に対して集団療法を行うと、むしろ治療をやらない群よりも予後が悪くなってしまう、というのが定説とされています。」

『家庭』であり『学校』であること」

「集団が『犯罪の学校』となる危険性」もあるとも指摘されます。

それでも富田先生は、「夫婦小舎制と言う稀有な治療文化が日本に残されていることは誇るべきこと」・「家庭学校での暮らしは集団治療であり、環境療法であり、個人心理療法であり、行動療法であり、これらを全て統合したものが生活療法だ」と評価されています。

また次のようにも指摘されています。「〇〇セラピーをやったら良くなりました、と言った単純なものではありません、子供の生物学的な面、心理的な面、子供の社会的な面のいずれかにも同時に働きかけなければならないのです。」

「ビジョン」発表以来急に強まって来ている、児童相談所の心理職への依存に対する忠告とも取れます。施設が自ら築き上げて来た養育の文化を放棄することになってはいけなないのです。

一言で言えば、スイスの教育者ペスタロッチの「生活が陶冶する」に、それぞれの施設が立ちかえらねばならないのでしょう。しかし今、その「生活」が問題になります。施設の生活とは、先ほどの人間不信を乗り越え、弱い自己コントロールや規範力を鍛え強いものにするものでなければなりません。普通の家庭のように何となく生活していれば、いつの間にか身につくものではないのです。そこで出て来るのが「自然による教育」ではないかと思うのです。家庭学校で言えば、農業を中心にした様々な「作業」、友愛園で言えば「労作」です。

家庭学校の子供たちは、公教育を取り入れた今でも週3回は、午後に作業を取り入れているということです。その成果については、12月に発表会を行い、一人ひとりが写真や表を使い報告するのだそうです。友愛園でも、土、日のどちらかに1時間から2時間、労作に汗を流します。中高生については、秋の収穫感謝祭で作文にして、1年を振り返ります。多くの子供たちが、忍耐力をつけ、自信をつけ、自己肯定感を高めていきます。

今まで私たちは、先人たちから受け継いだ一つの生活として何となくやって来ましたが、今後は、一

つの福祉文化として位置づけ、カリキュラム化し、定期的に評価反省して、その子供たちの資質の獲得と伸長を、見える化していく必要があります。最終的な獲得の目標はプライドと誇りです。友愛園の子供たちの高校卒業生半分以上が専門学校・大学に進学できるようになったのは、それらの資質の獲得の結果だと思えます。

この一連の作業を、これからやらないと、グローバル化の流れにのみこまれていくのでしょうか。

6月27日（火）、午前10時頃に、なつかしい北海道家庭学校を私たちは訪問しました。すぐに校長室に通され、校長の軽部晴文先生と副校長の清水真人先生が応対してくださいました。軽部先生は出入りはあったようですが30年以上家庭学校で働かれ、この4月より校長として戻って来られたということでした。たたきあげの方で、北海道家庭学校の福祉文化については、何としてでも死守したいと言われ頼もしく感じました。午後の作業を週3日、小・中学校の分校の先生方と守っていること、フロを薪で炊いていること等説明されました。その後お二人に案内されながら園内を散策し、50年という年月を飛び越えて記憶が蘇りました。嬉しかったのは、望みの岡の礼拝堂が全く変わらず、直立不動の姿勢で森の中に建っていたことです。何があろうとも、この北海道家庭学校の精神と文化を守ってくださっているように見えます。

午後からは、樹下庵診療所で子供たちを診察されている富田拓先生が少しの時間面会してくださいました。私は初めての面会と思いこんでいましたが、なんと、石井記念友愛社に来られたことがあると言われました。急に親しみを感じ、突っ込んで経歴をお聞きすると、筑波大学の医学部を卒業され、国立の児童自立支援施設武蔵野学院で働いている時、谷昌恒先生との出会いがあり、家庭学校で指導員（教護）として5年間働いたとのこと。家庭学校内に診療所を開設することについては、先生の方から提案されたそうです。

一般の子供も診療されていて、遠いところは100K先から受診に来られていると、校長先生はおっしゃっていました。発達障がい、愛着障がいの多くなった現状の中で、小児精神科医との連携は最重要ですが、北海道家庭学校の先生方も心強いことでしょう。

富田先生は、「新しい家庭的養育ビジョン」については、「おかしい、施設のメリット面をあきらかに見落としている」と批判され、ホッとしました。

家庭学校を訪問して1週間時間を置いてから、この友愛通信を書き始めています。私が50年前実習した頃の先生も子供たちも、もうだれ一人いない。それであるのに厳然と家庭学校は存在し、歴史を刻み、そして、その福祉文化は守られている。自分の仕事人としてのスタートを切った場所の存在は、私のアイデンティティの基盤ともなっており、感動し、うれしくも感じました。

私もあと何年、この仕事に関わらせていただけるのかわかりませんが、子供たちの最後の砦（とりで）を守るために、また、次の世代に歴史と福祉文化をつなぐために、もうしばらくは踏張らなければならぬと思いました。